

[要旨]

政治としての発話行為 — 規範性の文脈化と脱文脈化 —

大河内 泰樹

本稿は、現代のカント主義的な規範理論の批判を通じて、言語行為における規範性の文脈主義的理解を提示することで、言語行為一般の政治性を明らかにすることを目的とする。その際参照するのはハーバーマス、ブランダム、バトラーの規範理論である。ハーバーマスの規範理論は生活世界におけるわれわれの言語使用の再構成を通じて規範を確定しようとするものであるが、そこで語用論的に取り出された規範は少なくとも現代社会においては普遍的な妥当性を要求するものとして理解されている。それに対して、ブランダムは規範的語用論において規範はあくまで過去の言語使用の蓄積と、それに依拠した当事者間の相互的帰属の問題として理解され、規範は歴史的文脈を背負うものとされる。ブランダムはダメットの論理的語彙の拡大に関する保守主義を批判しながら、Bouche という中傷語の例を用いて、言語使用の規範性が衝突し合いながら調和させられていく「進行中の解明過程」において探求されていくことを主張するが、規範性についてのこうした文脈主義的歴史的概念から、バトラーの中傷語についての分析をとらえ直すことで、「再意味づけ」というバトラーの政治的言語戦略が、たんにヘイトスピーチにかかわる戦略であるにとどまらず、あらゆる言語使用に伴うものであり、その限りであらゆる言語使用が潜在的にはわたしたちの生活世界を変革しうる政治行為として理解されることを明らかにする。